

# 槐 かい

岡井省二創刊

平成24年11月号

平成二十四年十一月一日発行 第二十二巻第十一号 通巻第二五七号 (毎月一回一日発行)  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 秋 簾

高橋将夫

菊 膾 す い も 甘 い も 知 つ て を る  
満 月 と 一 緒 に 闇 の 中 に を る  
抱 き し め て 知 る 藁 束 の 冷 や か さ  
衣 被 ほ ど に た や す く 脱 ぐ も の か

虫の音の止み悦楽の予感かな  
美しき人通るたび蚯蚓鳴く  
秋燕の小技まだまだよく切れる  
天の川を椰子の実一つ流れくる  
読む人と詠む人がゐて秋ともし  
古酒酌んで話は回りくどくなり  
日月の染み込んでゐる秋簾

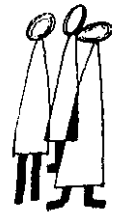
# 槐安集

水野恒彦

日輪は翳り易きよ金魚玉  
隣人といふ遠きもの素秋かな  
芒野に深く入りて浮遊せり  
舷梯を外してよりの天の川  
雁渡るときの羽音や白枕

延広禎一

山に入り分け入り深山蓮華かな  
寿ことほぎの浴衣弁慶格子縞  
鰻井の飯は小町よ共白髪  
祇園山笠艶ある臀おしじま競ひをり  
藍染のゆるきすててこいのちなが寿



加藤みき

草の花どれも故人の影をもつ  
漂うて寄りたる海月強面  
塩とんぼ行つたり来たりして横に  
ゆきあひの空美しや汗滂沱  
こゑあげて笑ふ赤ン坊碓星

石脇みはる

満月の影ひきみたる蟹満寺  
栗の花少年頭五分刈りに  
貝殻の散らばる月の渚かな  
土用波持ち去りゐたる白砂かな  
親族の皆集まりし新走

中島陽華

暫くの大き片袖夜の秋  
山伏や極楽橋のくものいと  
新牛蒡トロツコ列車動き出す  
撫でもろうて秋茱萸の高さまで  
飛火野を抜けたるげんのしようこかな

竹内悦子

八月の荒神橋の真中かな  
天辺に魔物のけはひ百日紅  
裏側の青さ残れる簾かな  
向う脛打つや鬼灯熟れてをる  
靴下に指五本ある無月かな

栗栖恵通子

大とかげ形見の尻尾くれてやる  
みんみんや父の享年二十四  
大文字のさまに寝ねたり生身魂  
端溪の墨に虹生る秋はじめ  
秋簾産土とほくなりけり

大島翠木

しづかなる鬱白桃に漂ひぬ  
ケルンより石を貰ひて秋の谷へ  
かたまれば分相応の曼珠沙華  
水澄めり隠し鏡のやうな池  
男郎花藍しづかなる暈かな

雨村敏子

四万六千日一の橋より滝道へ  
琅玕を洗うてゐたり盆の潮  
噴水の水の高さの影踊る  
くずきりは黒蜜仕立河原町  
よさこいよさこい二万が踊る法被かな

本多俊子

鷺草の恋の翼をひろげ初む  
烏揚羽ゆれつつ蜜を吸つてゐる  
西瓜の種を父の魂と思ふまで  
また雨の降る萬葉の萍に  
罪と罰女が睨む花氷

近藤喜子

虫鬼灯たましひ柔らかく呆け  
秋の蝶ひたすら川を渡りゆく  
やはらかく穴を消しゆく秋の水  
乱れ舞ふかげろふに刹那の快樂  
虫の音や父母ぬし頃も亡き後も

谷村幸子

打水を天にもろうて真昼なり  
蓮の花ま顔でまはす念珠石  
腕白の声とびかふや水鉄砲  
設計図かこみて石工冷茶飲む  
本棚に芒種の風を入れてをり

瀬川公馨

月光に裁かれてをりりベラ・メ  
野葡萄の聯はそのままそのまに  
夏の月黄肌まぐろと遣り取りす  
もじずりの聖処女もどきなりしなり  
つちくれや鬼神泣かせの芋の蔓

久保東海司

清流の鬪ひ知らず太き鮎  
芒が原思い思いの風捕う  
ストローが終りを告げしソーダ水  
鈴虫のひねもす鈴を振る習ひ  
川べりの声のふえくる螢狩

西村純太

眼の覚めて右手を撫でる今朝の秋  
朝顔の虚空に一花敗戦忌  
二生経たる昭和遠のく終戦日  
朱を入れる墓石の文字の涼新た  
三味線のポツンと鳴りて生身魂

中野京子

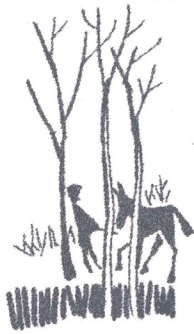
白玉や影でつらなる身と心  
地の底の声を上げをり蟬しぐれ  
総身のアンモナイトとなる昼寝  
大夕日の窓の火群や洗髪  
水羊羹今日一日の着地点

柳川 晋

我が宇宙小壇に詰めて飯匙は倩酒がとす  
信ずればこそ蛤になる雀  
月天心大日如来の寢息のみ  
雲に色あづけて風は色を消す  
爽やかに肩をばおんと叩かるる

岩下 芳子

とんばうのときどき目玉洗ひけり  
砂糖黍畑の向う宇宙基地  
稲妻と一対一で黙んまりぬ  
睨み利く美人案山子のアイメイク  
白日の海の色透く烏賊襖





# 槐市集

中道愛子

夕涼み沖の漁火見えて来し  
昼寝覚め賽の河原をさまよへり  
南国のマンゴの香り盆見舞  
テールに貝がらひろげ夏の果て  
木槿咲き人の暮しの変りなし

中山とし子

上布着て女の座る連子窓  
僧の声途切れがちなる溽暑かな  
鉾立に眼清しき異人をり  
火の点くや祈りの山の鎮まりぬ  
十方を平らかにして五山の火

橋本正二

染髪にミスト降りくるアーケード  
車輪梅のこぼれし歩道秋夕べ  
軒下に鳩迷ひこむ今朝の秋  
うたた寝のシーツの皺や麦の秋  
襟足のながき女ひとなり宵祭

橋本順子

青柚子や兄に負けじときかん坊  
風筋に足遊ばする端居かな  
ためらはず毛虫を踏み増女  
人攫ひ出る頃なりし蚊食鳥  
消え際の美しくありけり大火花



# 槐集

## 高橋将夫選

祝前田美恵子氏「青鷹」句集上巻

幾つ山幾つ川越え青鷹 京都 竹中 一花

東山三十六峰笑ひ茸

一遍のこゑからからと山の秋

さざ波の運びし早稲の匂ひかな

新たな涼をうなじに河原町

どの蔓も今けんめいの大暑かな 枚方 熊川 暁子

三輪<sup>み</sup>山の蜘蛛夜には赤き糸を吐く

山門の古色を洗ふ蟬しぐれ

毛虫ささやく天神の牛の耳

空蟬と所番地を同じうす

夏の果人の真情把握せり 岡崎 鈴木 初音

百日紅のきに空つぽ燕の巢

明暗もみんな絡みて天高し

甲羅経し漢の頭上に秋津ふゆ

混濁は清む証なり菊開花

どこ迄が本心夏の大三角 寝屋川 前田美恵子

大文字五躰崩して乗り出せり

のしかかる言葉の重みちろ鳴く

一瞬に彼の世を覗く稲光

酷暑かな我の六腑の不甲斐無さ

八月や六日九日十五日 枚方 谷岡 尚美

孤<sup>こ</sup>高なる鷹の旋回奥琵琶湖

香ほのか市に見つけし新生姜

晚夏光おおき背中のウイニングラン

氷酒琥珀色なりボルガ河

法師蟬向うの山の木霊とも 高松 十川たかし

もの少し食ふて土用のいのちはも

蓮咲いて遠くの白のよく見ゆる

何蟬といふことなく鳴きはじむ

やいと花かかる高みに来てゐたる

# 銀河往来 高橋将夫

## ◇「槐集」観照

東山 三十六峰 笑ひ 竹中 一花  
山に昔が生えているわけだが、東山三十六峰とは恐れ入る。  
しかも笑い昔といわれたら笑う他はない。まことに俳諧。  
〈一遍のこゑからからと山の秋〉へさざ波の運びし早稲の匂ひ  
かな〉は秋の山と実り田の景が巧みに表現されている。

空蟬と所番地を同じうす 熊川 暁子  
所番地を同じくする相手がよりによつて空蟬というから二の  
句がつけない。ことによつたら、無常の世界かもしれない。

甲羅経し漢の頭上に秋津ふゆ 鈴木 初音  
甲羅を経た男というから、年功を積んだ老練な男なのだ。ど  
うやら蜻蛉はそんな男に興味があるらしい。

〈明暗もみんな絡みて天高し〉へ混濁は清む証なり菊開花〉：  
いい時も悪い時も、いつもこのように前向きな気持ちでいたいも  
のだ。

どこ迄が本心夏の大三角 前田美恵子  
私の場合は全て本心である。ちなみに、夏の大三角はこと座  
のベガとわし座のアルタイルとはちよう座のデネブを結ぶ三  
角形。

八月や 六日 九日 十五日 谷岡 尚美  
数字を並べて八月という季語の本情の一面を捉えている。八  
月六日は広島に、九日には長崎に原爆が投下され、十五日に終  
戦を迎えた。八月はそんな月なのだ。

蓮咲いて遠くの白のよく見ゆる 十川たかし  
蓮の花を眺めながら、遠くの白い蓮にまで目をやる何気ない  
所作に作者の精神の位相が汲み取れよう。  
〈法師蟬向うの山の木霊とも〉にも、はるかなものへの眼差  
しが感じられる。

純粹なクピドの瞳 マスカット 岩月優美子  
クピドの瞳はマスカットのようにだという。日本の女神なら黒  
い瞳なのだろうが、ちなみに、エロスはギリシャ神話の愛の神。  
ラテン語名がクピドで、キューピッドはその英語化。

真ッ向に満月われに欠けしもの 中田 禎子  
人は誰でもどこかに欠点を持っているものだが、満月を見て  
自分の欠点に思いをいたすところに作者の人柄が見えて共感を  
覚える。

冷気には靈気の宿る滝しぶき 江島 照美  
滝のひんやりとした雰囲気に靈気を感じたのであるが、冷気  
に靈気と畳み掛けた表現が巧み。へ雄叫びをあげて神呼ぶ滝開  
き〉へ切麻の舞ふ滝壺の靈気かな、滝三句。

秋草の土ある限り命這ふ 山根 征子  
伸び放題の夏草。秋に入っても土のある限り草は生え続ける  
のだ。へ布団干し叩けば夏日匂ひ散る、夏蒲団から夏の匂が漂っ